

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02682

研究課題名(和文) 共有志向性に基づく事態把握モデルに関する研究

研究課題名(英文) A Study of Event Construals based on Shared-Intentionality

研究代表者

町田 章 (Machida, Akira)

広島大学・人間社会科学研究科(総)・准教授

研究者番号：40435285

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、主体性・主観性と共同指向性(間主観性)に基づいて統一的な事態把握のモデルを提案した。特に、事態内視点と事態外視点および同化型間主観性と対峙型間主観性という話し手と聞き手の事態把握の様式および相互認識に関する提案を行い、それらに基づいて、様々な日英語の現象について考察を行った。この研究を通して、先行研究では整理が難しかった主体性と主観性、客体化と客観化などの諸概念の相互関係が明らかとなり、それらを生み出す事態認知のメカニズムが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言語は一般に個人内の認知現象と個人間のコミュニケーションの現象に分けて議論されることがある。本研究では、これらを一つのモデルに統一することで、様々な言語現象が演繹的に説明できることを示した。また、このモデルを用いると、言語間の差異に関してもかなり予測をすることができる。話し手が他者を自身に同化する同化型間主観は日本語全体の様々な言語現象を予測し、話し手が他者の意識をシミュレーションすることによって得られる対峙型間主観は英語の全般に見られる様々な言語現象を予測することができる。これにより、日本人英語学習者が陥りがちな誤りを前もって予測することができることが期待される。

研究成果の概要(英文)：This study has proposed a unified event construal model on subjectivity and shared-intentionality. Two distinct modes of self-recognition (event-internal and event-external viewing arrangements) and two different communication stances (face-to-face and side-by-side) are proposed on subjectivity and shared-intentionality. Through our investigation, three distinct usages of the term “subjective” are revealed: i) perspective, ii) domain, and iii) diffusion. The latter two in particular have been the focus. The more subjective elements in the subjective scene are objectified, the more “subjective” the expression will be colored, in that some portion of subjective elements is explicitly involved in its meaning. The diffusion of the subject of conception caused by assimilating others’ mental states with the speaker is also considered “subjective,” in that others are invited to take the speaker’s personal view.

研究分野：言語学

キーワード：主観性 間主観性

## 1. 研究開始当初の背景

認知言語学は、言語能力と他の認知能力は不可分であるとの立場を取り、自律的統語論を中心とした言語研究の限界を乗り越えることを目指している。そのため、認知科学一般の様々な研究と連携しながら複眼的に言語現象を調査研究している。そのようなスタンスに立つ認知言語学の中でも、Langacker の提唱する認知文法は、従来の樹形図や形式的操作を用いずに様々な言語現象を記述するための認知図式を開発してきた。その点で、認知文法は現在の認知言語学のパラダイムの中では最も際立った存在となっている。

しかしながら、認知文法研究の現状は以下のような問題を抱えているといわざるをえない。

認知文法には、その理論構築の過程で英語バイアスがかかってしまっている可能性がある。実際、認知文法の図式をそのまま他の言語(日本語など)の分析に援用しようとすると不自然な分析になることがある。

現在、心理学や哲学など、様々な分野で言語コミュニケーションの起源に重要な役割を果たしているとして注目を集めている対人的社会的認知能力である共有志向性(shared intentionality) (cf. Tomasello 2014) を認知文法の枠組みに取り入れる試みはいまだになされていない。

上記のような現状を踏まえ、本研究では、事態把握に果たす話し手の役割だけでなく、共有志向性に関わる共同注意や間主観性という聞き手と話し手の相互認識に関する概念を取り入れた事態把握モデルの構築を推し進めた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、Langacker の認知図式では十分に記述しきれない共有志向性に基づく事態把握の認知モデルを提案することにあつた。Langacker の認知図式は、認知主体が事態を外から眺めるというステージモデルを前提としているため、話し手と聞き手が互いに志向性を共有する共有志向性を図式に反映させることができない。そのため、話し手と聞き手の共同注意が深く関与している、いわゆる‘省略現象’が頻繁に見られる日本語のような言語を正しく記述することができない。本研究では、Tomasello(2014)等で主張されている共有志向性の観点から主観性(客観性)の問題を捉えなおすことにより、共有志向性(間主観性)を組み入れた新たな事態把握モデルを提案した。

## 3. 研究の方法

非明示項の認知図式化に関する研究を行った。例えば、(1)のような表現に見られる主語の省略は、一見、同じ現象であるかのように見える。しかしながら、両者は全く異なる。(1a)は(2a)のように省略された主語を明示することができるが、(1b)は(2b)に示すように通常は主語を明示化できない。明示化すると「他の人は別として僕は」という対比の解釈が出てしまう。両者の振る舞いがこのように異なるのは、前者はゼロ照応と呼ばれる現象であり、後者は認知主体の主観性(主体性)に関する現象だからである。

- (1) a. 広いなあ。
- b. 眠いなあ。
- (2) a. この部屋は広いなあ。
- b. ? 僕は眠いなあ。

研究全般を通して、(1b)のような主語の省略に見られる事態把握のメカニズムを明示的に図式化することを目指した。本研究では、ゼロ照応ではない話し手主語の省略は話し手と聞き手の同化型間主観が成立している談話内の要素において出現すると提案し、日本語においていかに同化型間主観が重要な役割を担っているのかを示した。

スケジュールとしては、国内学会と国際学会における研究発表を柱に研究を組み立て、国内では、日本認知言語学会、日本言語学会、日本英語学会において研究発表を行った。また、国際学会としてはエストニアにおいて開催された国際認知言語学会 ICLC 14 で研究発表を行った。しかしながら、研究期間の後半では、新型コロナウイルスによる社会情勢の変化によって、研究発表の機会はなかった。

## 4. 研究成果

以上の研究手法により、本研究では、主体性・主観性と共同指向性(間主観性)に基づいて統一的な事態把握のモデルを提案することができた。特に、話し手からの認識が直接現れる事態把握の在り方である事態内視点と話し手が自己を客体視する事態把握の在り方である事態外視点という二つの事態把握の在り方が、話し手と聞き手のコミュニケーションの際のスタンスの在

り方に起因していることを示した。話し手が聞き手と同列に位置しそれぞれが同じものを見ている場合、話し手は聞き手の存在を忘れことがある。この他者認識の欠如が聞き手の認識を話し手の認識と同化することを可能にする(同化型間主観性)。一方、話し手と聞き手が向かい合ってお互いの存在を認識しあっている場合には、このような同化型間主観性は生じえない。話し手と聞き手が向かい合っている場合には、お互いの認識を通して自分を見つめるという対峙型間主観性が生じる。この対峙型間主観性は話し手に自己の客体視を強いるため、結果として、事態外視点が話し手の認識内に生じることになる。つまり、事態内視点は同化型間主観性の帰結として生じることになり、事態外視点は対峙型間主観性の帰結として生じると結論付けられるのである。このモデルにより、従来、別々に研究されてきた個人内の認知現象と個人間のコミュニケーションの在り方が統一的に論じられるようになった。

また、この同化型間主観性と対峙型間主観性は、言語間の好まれる言い回しの差異を説明することができる。例えば、誰かのスーツを褒める際、英語では(3a)のように表現するが、日本語で(3b)のように表現するのは極めて不自然な感じがする。日本語の場合、通常、(4a)のように表現するが、英語では(4b)はあまり用いられない。

- (3) a. I like your suit.  
b. 私はあなたのスーツが好きです。
- (4) a. そのスーツ、素敵ですね。  
b. Your suit is nice.

これは、英語では対峙型のコミュニケーションを行うため事態外視点で物事を捉えるのがデフォルトであるのに対し、日本語では同化型のコミュニケーションを行うため事態内視点で物事を捉える傾向が認められるからである。

本研究では、このように日英語の様々な違いを統一の事態把握のモデルによってとらえることができることを示したが、これにより、文化と言語の関係を統一的に説明する道も開けた。これまで、これらの現象は主観的事態把握 vs. 客観的事態把握(池上 2001)、situation focus vs. person focus(Hinds 1986)などとして指摘されてきたが、なぜこのような認知的な差異が日本語と英語にはあるのかについては検討されてこなかった。それに対し、本研究では、認知的な差異は、コミュニケーションのスタンスの差異に還元され、そのようなコミュニケーションスタンスの差異は、「甘え」(土居 1971)、「個人志向 vs. 集団志向」、「高文脈文化 vs. 低文脈文化」(Hall 1976)「ウチとソト」(和辻 1935)などの文化の差異に還元できることが示唆されている点で新しいと言える。以下、年度ごとに具体的な研究成果について記載する。

2017 年度はエストニアにおいて開催された国際認知言語学会 14 大会(International Cognitive Linguistics Conference 14: ICLC14)において口頭発表を行った(On "Objective" Construals: A Cognitive Account of (Inter)subjectification)。この発表において、Langacker が観察している *It's hot in Chicago.* と *Chicago is hot.* という表現に見られる主観性の差異を生み出す認知メカニズムを明らかにするとともに、間主観性は拡張型間主観性と収縮型間主観性の二つに分類する必要があることを提案した。

2018 年度は、日本英語学会第 36 回大会(横浜国立大学)と第 9 回認知文法研究会(大阪大学)で口頭発表を行った(日本英語学会「事態把握様式における他者 - 認知文法から見た 2 つの間主観性 -」、認知文法研究会「グラウンディングシステムからみた認知類型論の試み」)。これらの発表において、聞き手の認知的スタンスが話し手に同化されてしまうようなコミュニケーションのあり方と言語表現の関係を認知図式を用いながら明らかにすることを試みた。また、本研究と関連して日本言語学会第 156 回大会(東京大学)において口頭発表(「制御不能感と日本語被害受身 - 周辺事例から見えるもの -」)を行い、同タイトルの論文が『日本言語学会第 156 大会予稿集』に掲載された。

2019 年度は、「間主観性の類型とグラウンディング - いわゆる項の省略現象を中心に」(南佑亮、本田隆裕、田中英理(編著)『英語学の深まり、英語学からの広がり』、英宝社、東京、245-258.)を刊行し、その中で、話し手が他者の視点を自己に同化(assimilate)させることによって成立する同化型間主観性が存在することを主張し、それが明示型グラウンディングと非明示型グラウンディングの差異を生み出すと提案した。そして、話し手と聞き手の共同注意が深く関与している、いわゆる「省略現象」が頻繁に見られる日本語のような言語を正しく記述するためには、この同化型間主観性を積極的に事態把握モデルに組み入れていくことが必要であると提案した。また、2019 年度は学会での研究発表は行わず、書籍や解説記事の執筆に時間を費やした。特に、柴田美紀(責任編集)『ことばの不思議の国』では、「第 3 章 あいまいな日本語の私」、「第 4 章 切っても切れないことばと心」、「第 5 章 ことばを通して世界を見れば」を担当し、人間の事態把握のあり方と言語の関係について解説した。本研究との関連では、第 5 章において共同志向性の問題について詳しく検討している。また、10 月よりひつじ書房ウェブマガジン未草において「認知文法の思考法 - AI 時代の理論言語学の一つのあり方 - 」という連載(全 12 回)を開始し、認知文法の基本的な考え方と AI (特に、Deep Learning) の発展がもたらす理論言語学

への影響、および、それに伴う英語教育の変容について様々な角度から議論した。(各回のタイトルは以下の通り。第1回 連載にあたって、第2回 理論言語学に対するディープラーニングのインパクト、第3回 大量に聞いて覚えると話せるようになる？、第4回 “常識”で壁を越える、第5回 勝敗は誰が決めるのか？、第6回 心の中のマトリョーシカ、第7回 経験がことばに命を吹き込む、第8回 意味は話者の中にある、第9回 意味を育む豊かな土壌、第10回 ベッドに合わせて足は切らない、第11回 話すために考える、第12回 外国語教育に別解を)

2020年度の成果は、主に以下の4つである。認知言語学の研究成果を日本語学研究にも援用することを目的として企画された「認知日本語学講座」(全7巻)のうちの第3巻『認知統語論』の執筆を行った(刊行は2021年度)。また、言語のインターフェイスについて各分野別にテキスト・入門者レベルに焦点をおいた概説書として企画された「言語のインターフェイス・分野別(テキスト)シリーズ」(全4巻)のうちの第4巻目の第5章「意味論・語用論と「視点」とのインターフェイス」を執筆した(刊行は2021年度)。「視点」をキーワードに話し手の捉え方の問題から他者の視点の問題までを議論した。また、本研究課題の発展として、「認知文法とメタファー - be going to の分析を通して - 」という論文を執筆した。この論文では、認知文法におけるメタファーの扱いを詳細に検討し、認知文法の真の目的はメタファーそのものではなくその背後にある認知領域に束縛されないスキーマの解明にあると結論付けた上で、be going to の文法化に関する Langacker の分析を批判的に検討し、メトニミーと空間移動の背景化による代案を提出した(近刊)。以上の成果は、人間の事態把握における捉え方の問題、主観性の問題、図式化に関する問題など多岐にわたっているが、中でも間主観性に関する考察を通して自らの考えが整理できた。

2021年度は、新型コロナウイルスの影響もあり学会等で研究発表する機会を持てなかったが、これまでの研究成果をまとめた書籍を刊行することができた(町田 章・木原恵美子・小熊猛・井筒勝信 『認知統語論』くろしお出版)。「認知統語論」では、「第1章 認知文法の基本概念」(pp.1-41)において、認知文法の基本概念やその思考法を紹介したうえで、特に、「第3章 日本語らしさと認知文法」(pp.111-157)と「第4章 概念の構築と格助詞スキーマ」(pp.159-213)において、主観性の問題の整理と事態内視点・事態外視点の提案、さらに、そのような二つの視点配置を成立させるコミュニケーションスタンス(同化型と対峙型)の提案を行い、これに起因する二つの間主観性の類型を行った。本書の出版をもって本研究の目的は一定の基準で達成されたと考えてよいものと思われる。また、本書の「第5章 構文拡張の認知メカニズム」(pp.215-268)においては、これまで研究を続けてきた日本語の「ラレル」の多義性および被害受け身における被害性の起源についても検討を行った。最終的には、「あとがき - 認知文法の展開 - 」(pp.329-338)においては、新たな局面に入った Langacker の認知文法について概要をまとめたうえで、その意義について紹介している。また、米倉よう子(編)『意味論・語用論と言語学諸分野とのインターフェイス』開拓社の第4章「意味論・語用論と「視点」とのインターフェイス」(pp.73-97)においても、間主観性の類型における同化型間主観性がもたらす語用論的現象について議論した。また、菅井三実・八木橋宏勇(編)『認知言語学の未来に向けて』開拓社においては、AI の発展に伴う英語教育の果たす社会的役割の変化とそれに連動して認知言語学の研究成果がより重要性を増していることについて議論した(「認知言語学と「捉え方」 - 英語教育への提案 - 」 pp. 203-214)。

最後に、本研究の成果を一つにまとめた論文(Objectification and Diffusion of Subjective Elements: Toward a Unified View of(Inter)subjectivity)が *Journal of Cognitive Linguistics* 8号に掲載される予定である(2022年6月刊行予定)。この論文の出版をもって、本研究課題はその目的を達成し一定の成果を得たと考えてよいだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 町田 章	4. 巻 156
2. 論文標題 「制御不能感と日本語被害受身 - 周辺事例から見えるもの - 」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『日本語学会第156回大会予稿集』	6. 最初と最後の頁 259-264
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 町田章	4. 巻 17
2. 論文標題 日本語間接受身文の被害性はどこから来るのか？ - 英語バイアスからの脱却を目指して -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 540-550
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Machida, Akira	4. 巻 8
2. 論文標題 Objectification and Diffusion of Subjective Elements: Toward a Unified View of (Inter)subjectivity	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『認知言語学研究』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 町田 章
2. 発表標題 「事態把握様式における他者 - 認知文法から見た2つの間主観性」
3. 学会等名 日本英語学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 町田 章
2. 発表標題 「制御不能感と日本語被害受身 - 周辺事例から見えるもの - 」
3. 学会等名 日本言語学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 町田 章
2. 発表標題 「ことばの扉を開ければ - 英語学・言語学の認知度を上げる - 」
3. 学会等名 大阪大学英文学会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 町田 章
2. 発表標題 グラウンディングシステムから見た認知類型論の試み
3. 学会等名 認知文法研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Machida Akira
2. 発表標題 On "Objective" Construals: A Cognitive Account of (Inter)subjectification
3. 学会等名 International Cognitive Linguistics Conference 14 (国際学会)
4. 発表年 2017年

## 〔図書〕 計7件

1. 著者名 柴田美紀（責任編集），町田章，山根典子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 153
3. 書名 『ことばの不思議の国』	
1. 著者名 辻幸夫（編集主幹），町田章，他79名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 847
3. 書名 『認知言語学大事典』	
1. 著者名 南佑亮，本田隆裕，田中英理（編著），町田章，前川貴史，山口麻衣子，岩橋一樹，黒川尚彦，水谷謙太，米倉よう子，岡田禎之，吉本圭佑，平山裕人，島村貢志，田中秀治，西口純代，山口真史，今西佑介，森英樹	4. 発行年 2020年
2. 出版社 英宝社	5. 総ページ数 268
3. 書名 『英語学の深まり，英語学からの広がり』	
1. 著者名 町田 章	4. 発行年 2019年
2. 出版社 鶴見書店	5. 総ページ数 92
3. 書名 Thinking for Writing	

1. 著者名 米倉よう子（編），町田章，他6名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 198
3. 書名 『意味論・語用論と言語学諸分野とのインターフェイス』	

1. 著者名 菅井三実，八木橋宏勇（編），町田章，他33名	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 401
3. 書名 『認知言語学の未来に向けて』	

1. 著者名 町田章，木原恵美子，小熊猛，井筒勝信	4. 発行年 2022年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 365
3. 書名 『認知統語論』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>認知言語学研究室  <a href="https://home.hiroshima-u.ac.jp/akimachida/">https://home.hiroshima-u.ac.jp/akimachida/</a>          認知文法の思考法：AI時代の理論言語学の一つのあり方（ひつじ書房ウェブマガジン未草）  <a href="http://www.hituzi.co.jp/hituzigusa/category/rensai/cogai/">http://www.hituzi.co.jp/hituzigusa/category/rensai/cogai/</a>          人の心から見たことば  <a href="https://www.hiroshima-u.ac.jp/HU_research/souka/souka007">https://www.hiroshima-u.ac.jp/HU_research/souka/souka007</a></p>
--



6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------